

随 筆

老親の看取り

堀川 よしみ

知らないうちに自分の年齢が還暦に近くなり、親は高齢となりました。

同年齢の友人たちと飲むときの話題に、老親をどうするか、あるいはどうしたか、という話題がかなり出てきます。

父は87歳でまだ元気ですが、2年前に母親が胆嚢癌により84歳でなくなりました。

両親は藤枝市でずっと二人暮らしをしていたのですが、3年前に父が84歳、母が83歳になった頃、母が食事の支度や掃除洗濯を行なえなくなり、食事はほぼすべて近所のスーパーのお惣菜を買い、掃除洗濯はすべて父が行なっていることが分かり、名古屋の老人施設に呼ぶことにしました。

その話を持っていったとき、父は自分が毎日苦勞しているのに、すぐにでも行きたい、と言ったのですが、母は自分が特に不便を感じていないため、「何も困ってないから、友達もいないところに移るのはいやだ」と言ってかなり抵抗しました。

両親が仲良くしている御住職にお願いして、「老いては子に従え、だから」とお話いただいたりして、3年前の10月に何とか名古屋に来てもらうことになりました。

実際老人施設に移ったあとは、毎回の食事がとてもおいしくて、風呂も広くて気持ちがよいため、母親も大満足で引っ越すのを嫌がっていたことなどあっという間に忘れてしまいました。休みの日には両親を連れて、なばなの里、津島神社、可児市の花フェスタ記念公園など近隣の観光地に出かけ気晴らしをしていました。

老人施設に入居してちょうど1年後の10月に母が腰背部痛を訴え、私の勤めている病院でCTを行なったところ、進行胆嚢癌で肝・十二指腸に強く浸潤していました。それまで食欲旺盛で何の症状も無く、定期的な血液検査でも肝機能やビリルビンに特に異常がなかったため、かなりショックでした。その時点で肝内胆管の拡張も生じつつあり、入院してまず検査ということになったのですが、入院までの数日で黄疸も出てきました。

入院後、ERBD チューブを挿入していただき、減黄されましたが、十二指腸への浸潤が強くなって食事が取れなくなり、CV 管理となりました。大動脈逆流もあり、バイパス手術もなかなか危険とのことで、BSC となったのですが、本人は退院を強く望んで、CV ルートを入れたまま入居している施設に帰ってきました。施設のスタッフに優しくしていただき、私も出来る限り毎日夕方見舞いに行き、ほとんど苦痛も無くすごして、11月24日に病気の発見後1ヶ月であつという間に逝ってしまいました。高齢者は食べられなくなったらあつという間だということであらためて認識しました。

母が亡くなった後、父は一時かなり元気を失い、あまり飲めないのに毎日ビールを飲んだりしていましたが、施設の中の仲良くなった方と話したり、散歩したりして元気を回復してゆきました。

父親は平成27年1月で88歳の米寿となります。対面で話している分にはまったく正常のようですが、物忘れがひどくなり、お金の管理も出来なくなっています。施設で暮らしているので、おかげさまで普段の生活にほとんど心配がいらないので助かっています。

父親もあと何年かしたら看取ることになるとおもいますが、それまでなるべく快適に過ごしてもらえたら、と願っています。

経済的に比較的余裕があるので非常に快適な施設を利用していますが、経済的に余裕がない場合は大変だろうと思います。

けっこう真剣に自分の老後の暮らし方を考えているこのごろです。

(海南病院 放射線科部長)